

「たすきがつないだ心」

川口市立飯仲小学校 五年 西村 律

「三、二、一、スタート。」

ピストルの音で駅伝大会がスタートした。まっている間はきんちょうしてお腹がいたくなり、何度もトイレに行っていたが、スタートは成功。三位でコースに出ることができた。

「一区を走れるなんてすごいじゃん。チームのためにも、律ががんばらないとね。」

そう言って応えんしてくれていた母の顔が心にうかんだ。しかしコースに出てすぐ、ぼくは後ろの二人にぬかされてしまった。やばい、そう思った時、後ろからドン、とぶつかられた。

よろけたとたん、何人かがぼくをぬいて走って行った。早くぬき返さないと、どんどん差がついて、みんなに負担がかかってしまう。何とかぬき返そうとがんばったけれど、なかなかぬくことができない。二区の仲間なたすきをわたす時は八位になっていた。申し訳ない、という思いでいっぱい、うつむきながらたすきをわたした。

「ごめん…。」

思わず声がもれた。くやしきでいっぱいになり、涙がとまらなかった。

仲間に顔向けができなくて、一人でお弁当を食べた。泣きながら食べていたら、おにぎりを落としてしまった。砂だらけのおにぎりは今のぼくみたいだ。そう思っていた時、

「律のせいじゃないよ。」

「お前、もっと速く走れただろ、気にすんな。」

仲間が声をかけてくれた。その時は何も言えなかったけど、声をかけてもらって少しだけ心が軽くなった。おにぎりの砂はとれなかったけど、ぼくの心の砂はとれた気がした。いつまでもくじけてちゃだめだ。ぼくは一人じゃない。その時、ぼくは本当の意味でたすきをつなげた気がした。一本のたすきが、ぼくと仲間の心をつないでくれた。

来年もまたぼくは駅伝で一区を走りたい。支えてくれた仲間といっしょに。